

## 第 51 回 滋賀県立美術館協議会 概要

1 開催日時：令和 4 年 12 月 15 日（木）10:00～12:00

2 開催場所：滋賀県立美術館 ワークショップルーム

3 出席者

滋賀県立美術館協議会 13 名中 12 名出席（うちオンライン参加 6 名）

石川委員、神田委員、木ノ下委員、蔵屋委員、後藤委員、馬場委員、原委員、前崎委員、  
光島委員、宮本委員、山田委員、山本委員（50 音順）

事務局

保坂ディレクター（館長）、木村副館長、山田学芸課長、近藤総務課長、  
山奥美の魅力発信推進室長補佐、他学芸員 7 名

4 会議次第

(1) あいさつ 滋賀県立美術館 保坂ディレクター

(2) 議題

①会長・副会長の選出

②令和 3・4 年度事業実施状況について

③滋賀県立美術館協議会収蔵品収集審査部会について

④多様な鑑賞について

5 概要

① 会長・副会長の選出について

事務局より、横浜美術館長 蔵屋委員を会長に、京都女子大学教授 前崎委員を副会長とする案を提出し、了承される。

②令和 3・4 年度事業実施状況について

<事務局から資料 2 に基づき説明>

### 【主な意見】

(委員)

二つ質問をさせていただきたいなと思っております、一点目は最初に組織体制の話をしていただきまして、それぞれの総務課・学芸課・教育コミュニケーション室の人員体制の話があったのですが、そちらにいらっしゃる、働いていらっしゃる例えば会計年度の職員さん以外の非常勤の方はいらっしゃるのでしょうか。

(事務局)

はい。こちらには全ての職員が記載されておりまして、常勤・非常勤含めて、これが全てということになります。

(委員)

他の美術館さんと比べても、極端に多いという訳でもなく、少なすぎるという訳でもないのかもしれないですけども、非常勤の方がいらっしゃるこの人数で年に4回くらいの企画展と教育普及の各地に出向いて行かれたり、館内でのプログラムもあったり連携事業もあったりという非常にたくさんの事業をこなしていらっしゃるの、ちょっと人数的にやっぴりすることが非常に多いなという印象を受けました。

もう一つは、作品の購入予算についてなんですけれども。美術品収集事業費として1,300万とついておられて、この中で購入と修復、点検というのは何を指しているのですか。まあ、どういうことにお金を使われているのかなというだけなのですけど。

(事務局)

この点検につきましては、もともと予算の時にはですね、定期的に収蔵作品の保存状態の点検をするために、作品を移動するにも作業の方に来ていただく必要もありますので、そういったような費用等が積まれてはいるのですが、ただちょっとお恥ずかしながら、今現状、網羅的に点検が進められているかという、そこまでは至っていないというのが実情でございます。

(委員)

購入が380万で実際に使われたのが250万で、この金額も決して多くないというか、やはりアール・ブリュットという新たな分野が加わって、こちらの日本画と現代アートという元々の分野とアール・ブリュットのコレクションを充実させていくには、なかなかちょっと少ない金額かなと。いい日本画を一点買ってしまうと無くなってしまうような金額なので、この部分はちょっと増額されないかなというふうなことで、さらには修復ということにもやはりお金がかかっていくと思いますので、この部分の予算というのも充実していけばいいなというふうに思いました。

(事務局)

補足しますと、250万はまだ今年度使っておりませんで、それを上限にこれから作品を、選定は大体済んでいるんですけども、委員会のほうにかけようとしている段階となります。で、実は後藤さんもお存知かと思うんですけども、全国の公立美術館を見渡した時に収蔵予算ゼロ・購入予算ゼロという美術館もあるなかで、当館のほうは一時期ゼロであったんですけども、アール・ブリュットの作品をコレクションとして、あるまとまりを持った形と

して形成していく必要があるということで購入予算が復活したという経緯があります。でするので、しばらくはアール・ブリュットだけを購入するという形で進めていたんですが、今年度はまだ執行していないとか委員会を開催していないので、あくまでもこちらの希望ということなんですけれども、今年度からはアール・ブリュットだけじゃなくてそれ以外のジャンルの作品についても購入対象としていくと。その 250 万という決して多くない金額を分けていくので何が買えるのかというところはあるのですけれども、でもきちんと当館のコレクションの中核の一つである日本美術に関しても、あるいは現代美術に関しても、毎年全部の種類を買うのは難しいかと思うのですが、都度都度見渡していきながら購入をしていきたいというふうに思っています。

(委員)

ホームページなんですけれども、これは観覧者を増やすというのとギャラリーの稼働率を上げるのとの二つなんですけれども、以前はホームページの中にギャラリーの使用の団体が載ってました。私の確認不足だったら申し訳ないんですけれども、最近新しいホームページが非常にきれいで見やすくいいんですけれども、その分が無くなっているなというふうに感じております。京都市京セラ美術館さんなんかでは各種団体の展覧会ということでそういったことも載せていただいていますけれど、ちなみにギャラリー今何やってるのか分からないとか空いている状況とかあると思いますので、そういった対応のほうはいかがでしょうか。されていないようであれば、また載せていただければ観覧者の増加とかギャラリーの稼働率の増加に繋がるのではないかと考えております。

(事務局)

ありがとうございます。ご指摘いただいたとおりですね、実はリニューアル以降ギャラリーをご利用いただく皆さんの予定というのが美術館のホームページでは未掲載の状態でした。今、ギャラリーの稼働率というか、より多くの方に使っていただきやすい環境を整えていこうというように考えておまして、ホームページの中でも紹介させていただけるように、どういうふうにしてホームページを構築すればいいかということを検討しております。あと、案内表示そのものも今なかなか辿りにくい着きにくいところにギャラリーの紹介等もございますので、そういったところも改善をしていきたいというふうに思っております。

(委員)

資料の最後のページに設備の整備？美術館庭園のリノベーションと書いてあるんですけれども、これは美術館庭園だけのリノベーションなんですか。

(事務局)

はい。美術館庭園のリノベーションというのはですね、ここで書いておりますのは、今回彫

刻の庭ですとか、コールドーの庭と呼んでいるんですけども、美術館の敷地内に屋外彫刻作品があるんですが、なかなかそちらがですね、今、石畳であつたりですとか気軽に歩いてけるような雰囲気あるいは環境ではないので、もう少し親しみやすくとかですね、例えば芝生張りにするなど、ということは今後取り組んでいきたいということも、実はここに書いているんですけども、もう少しその先にはですね、美術館の敷地内だけにとどまらず、せっかくこの恵まれたこの環境の公園の中にありますので、そういう公園全体でデザインを描いていくとかですね、楽しんでいただけるような仕掛けづくりですとか、あるいは案内表示の改変等も取り組んでいければというふうに思っております。

#### (事務局)

補足しますと、これは文化観光拠点という文化庁のプログラムへのその枠内での計画ということになります。なので、文化観光拠点として魅力ある場所になるために文化観光拠点の予算内でできそうなことということでリストアップしていることなので、今後うちの美術館は美術館整備としてこれだけを考えているということではなく、当然いろんなことをやっていきたいんですけども、あくまでもこの文化観光拠点の計画の中では庭園をきれいにしてこの「公園の中のリビングルーム」という例のキャッチフレーズをより充実したものにしていこう、そういう意味合いがここにあったんです。

#### (委員)

今ここで言ってもいいのか分からないんですが、私には1歳と4歳と7歳の子どもがいて、リニューアル前から子どもと一緒に通わせていただいているんですが、美術館周りの石畳のことを個人的に「デスロード」と呼んでいまして、ベビーカーで行くと大変なんです。3箇所あるどこの駐車場から行っても、石畳と段差がすごくあるんですよ。一番ましな北駐車場からは石畳がとにかくガタガタしている状態なんです。前のリニューアル構想の時にはその辺も解消できるかなという話だったので、「ああ良かった」と思っていたんですが、今回のリニューアルではそういったところは予算的に難しくなったのか全く変わらない状態だったので、ちょっと残念に思っていました。

今回リニューアルした時も来させていただきましたが、ちょうど一番下の子が1歳だったのでベビーカーで来たんですが、やはりガタガタで。導線がそういう状況だと来にくいんですよ。子育て世代の人は特に。リニューアル前のトイレはおむつ替えシートもとても変なところに付いていたり大変な状態だったので、今のキッズスペースは子育て世代としては本当にありがたいです。けれども、もうちょっとお庭だけでなく、車椅子の方なども目の前の専用駐車場からだけでなく、駐車場からの導線を散歩したり、お庭を見たり、ちょっと図書館も行ってみようかなという気持ちになる方向もあったほうがいいと思うので、できれば駐車場から美術館までの導線も良くなる方向も今後検討していただけないかなと思っています。全部きれいにしないでいいんです。せめて車椅子やベビーカーが難なく通れるように整備していただけると、子育て世代だけでなく、車椅子や、足の不自由な方なども来やす

くなると思います。

(事務局)

ご指摘ありがとうございます。ご指摘の件については、多々寄せられているところでして、われわれ美術館としても当然大きな課題であることは認識しております。美術館の敷地と公園の敷地というものが分かれているということが一つ大きなこととしてありまして、美術館の希望だけではどうしようもないというか、一種その縦割り行政というよく言われることの中で何ができるかというところで、新生美術館計画の時には要するに敷地を拡大するところがあったので、その中で園路の整備というものも検討できたかと思うんですけども、現状はなかなか園路に関してまではできないところがあるんですけども、希望のほうはずっと出し続けておりますので、いつか改善されることをわれわれとしても願っているということで、他人事のように聞こえるかもしれないのですが、問題としてあるということは重々承知しております。ご指摘ありがとうございます。

(委員)

何をどう言おうかなと悩んでいたところに指名されましたので、ちゃんと考えがまとまっているかどうか。まずは学芸の皆さま、スタッフの皆さま、限られた条件の中で一年間というか、どうもおつかれさまでございました。一方で保坂さんがディレクターという美術館のいわゆる名分だけの館長ではなく、ちゃんと実を伴うディレクターとしての館長を担っておられて、リニューアルして数年経つ中で逆に何かこう多分今の先ほどのお話で美術館に来るまでの全体の施策としての滋賀県全体の動線というビジョンと、その中の美術館の位置づけ、で、今日のお話はわりと中のこととして企画展とか収入予算のこととか、それはもう限られた中でよくやってらっしゃるなと思うんですけど、ここでどうしていきいたいかという今後のビジョンと、こちらの外に来るまでの県としての何か戦略が見えてるかどうかという、この中と外の関係なども見えていることがあればお話いただきたいなと思ひまして。すみません、だから意見というより質問ですが、いかがでしょうか。

(事務局)

ありがとうございます。先ほどちらっと文化観光拠点のところと、あとその前の連携のところでも申し上げたところではあるのですが、まず基本中の基本である県内施設の県立館からの連携というものをまずは始める、正直そこをできていなかったわけです。具体的に何をやるかなんですけども、本当にお金が無いとよく言われるところではあるんですけどもお金が無いところで何ができるかというところで、それぞれの固定ファンがいるわけですね。安土の博物館には固定ファンがいて、県立の美術館には固定ファンがいます。その固定ファン同士を行き来させることが一つ可能性としてあるだろうと。具体的にどういうことかという、例えばその安土の学芸員にうちの美術館でトークをしてもらい、うちの美術館の学芸員が安土に行ってトークをして、これはもう正直お金を掛けずにできることではあるん

ですが、県内の学芸というリソースを使いながら、美術館の人が話すんだったら聞きに行ってみようというふうに安土の固定ファンが聞いてくれて、そこから美術館のほうへ行ってみようかなというきっかけ作りができたらいいなとか、そういうほんとに草の根的な活動から始めていこうということの一つ考えております。壮大な野望というものはあるんですけども、この前、県博協でも話させていただいたのですが、滋賀県というのは奥ゆかしいところがあるのでなかなかアピールをしないところはあるのですが、要するに美術館からそう遠くない車で30分くらいの所にある陶芸の森というものが、たまたま同時期にちょっと関連性のある展覧会をすることがあるのであれば、それと一体化してイベントとして打ち出すことができるのではないかと、そういったことをこの前北陸のほうで秋元さんがやっている「GO FOR KOGEI」を見て考えました。あれはそんなに大きくない規模でやりながらも広報は大きく打つことで、非常に魅力的なものとして見せているというところがあったんですが、そうしたものを参考にしながら滋賀県の中で何かできるんじゃないかということを考えてわけです。が、それをある人に申し上げたところ、滋賀県というのは中心的な街が無いのでなかなか実際には難しいかもしれないよという指摘も受けているんですけども、それはそれとして意見と受け止めながら皆さんの意見をちょうだいしながら何かできるのではないかと考えていきたいと思っております。

(委員)

ありがとうございます。あと、広域性のある文化政策とか観光産業との結び付きみたいなこともさることながら、10年以上前、私がいた美術館の印象というか周辺のこと、住宅開発がすごくされてると思うんですね、だいぶ前から比べたら。地元の人との兼ね合いとかリピーターとか日常使いできるリビングルームとしてのたぶん入口というのをイメージされて設定されてたと思うのですけれども、なんか遠距離と近距離みたいなこの二つの施策の中で近距離圏の中のいろんな日常使いできる美術館としての試みというのはいくつか子どものワークショップとかやってらっしゃると思うんですが、その辺りの今後の何か政策というか戦略みたいなことって、一方でありますでしょうか。

(事務局)

まず一つに、このエリアの学区の人たちからも要望を受けて、先日教育チームのほうでこのエリアの瀬田東文化振興会というところからも要望を受けつつ、美術館のほうでワークショップを行いました。ここのエリアの学区の子どもたち向けに行ったわけですね。あともう一つ、「石と植物」展の時に、龍谷大の先生で森林生態学を専門にしている方なんですけれども、この方にこのエリアが持っている歴史、昔ここに梨畑があったことであるとかなぜこのエリアに溜池があるのかとかそういうことを、美術とは全く関係がないと言ってもいいことについてお話をさせていただきました。それを事前に図書館等でも告知をすることで当日は70-80名くらいの方々がいらして、拝見する限りではこのエリアの近くに住まわれている方々であろうとお見受けしたんですけども、そうすることで近隣の住民の方々との

結び付きということも少しは確立できたかなというふうに実感しておりますので、これについては今後も継続的にしていきたいと思っております。その先生に教えていただいたのは、実はこのエリアというのはキノコの研究の方にとってはこのエリアは実は聖地と呼ばれているらしくって、そういう生まれたエピソードというものがありますので、それをその美術館を拠点にして発信していけたらなど。それは木ノ下さんが京阪のあそこでいろんなことを美術と関係がないとか、いろんなことをやられていることからちょっと刺激を受けての着想にはなります。

(委員)

ありがとうございます。ネットワーク「クリエイティブアイランド中之島」というエクステンジブプログラムを、私たちも学芸員同士の交感みたいな感じで中之島の14機関とやっているんですけど、とはいえネットワークって口は易しでやるのは大変という、双方の日常があるのでそこをいかにこう繋いでいくかというご苦労をとてもお察しいたしますが、とても重要なことだと思いますし、単館だけではもはや生き残れない時代だと思いますので、ぜひともそういった試みを、継続していくことが重要だと思いますので、地道だと思いますが、そこをちゃんとアピールいけるような方策になっていくといいんじゃないかなというふうに考えます。広報としても。ありがとうございます。

(委員)

お話を聞きながら勉強させてもらってるかなというくらいで、なかなか意見とかというのはどうまとめていいのかなというところなんですけれども。そうですね、本学でも地域の、大学の外に出て学生たちが地域の問題であったりとか様々な関係性の中に入って行って、そのことによって学生自身もそういった地域のことに関心が向いていたり、その場所に愛着を持っていくという、ある種の当事者になっていくという4年間かけて少しずつ当事者化していくというようなことがあるのかなと思うんです。なので、うちの大学もありますし近隣には龍谷大学や立命館大学なんかもあるので、そういった大学生を、いい意味で外からやって来る子たちということだと思うんですけれども、そこがうまく根付いていたりとか当事者になるような何かそういった企画みたいなものも積極的にしていてもいいのかなと思います。いい意味でそういった外部の子たちって、ほんとに中の事情をあまり分からずに本人たちのやりたいことというのが前面化して行って、いいような何というかハレーション…いい意味でのハレーションみたいなことが起きてくる可能性もあるのかなというのは、ちょっと思ったりはしてきてました。あとこれは全然個人的な話なんですけど、美術館の近くにやっぱり美味しいごはんを食べれる場所が欲しいなあというのは、いつも思っています。リニューアルする前に何かできるのかなあと思っていたのですが、美術館の中にかろうじてカフェができてということなんですけど、先ほど木ノ下さんのお話で近隣の方々がどうやったら集まってくるのかとか憩いの場所になるということで、やっぱり何かそういったものが必要なのかなと思うんです。とは言いながらそこは、どうやったら採算が

取れるのかということもあると思いますし、民間の方々がどうやってそこに入ってきやすいとか魅力的な場所にしていくということが第一なのかなと思って聞いておりました。キノコの話はすごく面白そうですね。いろいろそういったみんなで何か研究したりとか一緒に何かするというので外から集まっていくと、新しいプロジェクトみたいなことが生まれていくんじゃないかなというふうには聞いておりました。

#### (事務局)

ちょっとだけ回答させてください。美味しいところについてなんですけれども。美味しいかどうかはわからないのですが、この美術館は公園内にあるわけなんですけれども、このびわこ文化公園がパーク P F I の対象になっておりまして、P F I によって公園の管理の業者が先日選定されました。その計画の中では今度の3月に公園の内部にバーベキューができる施設ができると。公園の中にある施設としては「バーベキューなのか?」という気持ちは正直あるんですけれども、これも公園を管理しているのはわれわれ文化施設ではないということもあって、バーベキュー施設が絶対だということが決められていて、将来的にまずバーベキュー施設ができたり、ワーケーションに使えるようなベンチと東屋が合体したようなものができたり、いろんなものがこの公園の中にできていく予定ですので、以前より滞在はしやすい状況になるというふうにはわれわれも期待しています。もちろんこの現状の非常にトラディショナルな公園のあり方を好むという声もあるんですけれども、今のところはそういう計画が進んでおります。

#### (委員)

そうですね。今の話って、ここに来るのも初めてで私なんか結構フランクな人間なんですけれど、何かこう、いわゆる会議を私は参加させていただいて、なんかとりあえず最初の30分、送られてきた資料を読まれてるだけで全然面白くないとか、これずっと見ていたらまあ大体わかることをあらためて30分使われると、もったいないなという感じがすごかったです。ここに集まっている方々すごい多分時給高い人たちいっぱいなので、お金が無いって言うんやったらもうちょっと何かやり方あるやんていうのがまず一つ目のことで。すみません、ほんとにこういうこと言っちゃうんで。で、あとは、もちろん県のやり方としてこういうふうにはやらないと、いろいろと外部の人が見てるかもしれんから危ないとかそんなこともあるんだと思うんですけど、それにしろ、何かもっとやり方あるん違うかなというのが一つ。もう一つは、今の話って基本的に提供している側の理屈だったりっていうか、地域連携しないといけないとか地域の人たちが憩いの場を提供しなければいけないとか。でもお金無いし。で、建物もどうしようもないしお金無いから、これ以上動線何とかすることは無理やし、その中で何とかしていかないといけないということと思うんですけど。まあそれは言ってもしゃあないので。で、私はまあ言ったら女子大学で美術あまり興味無い子に常に教育してる訳ですが、何か今ホームページ見せていただいて今の現状の展示の見せ方とかを見ていると、すみません、ぶっちゃけ言うと「見てみたい、面白そう」という見せ

方はされてないので。例えば私は山元春拳めっちゃ興味ありますけど、山元春拳知らない人が「生誕 150 年山元春拳」を見た時に、その映っているビジュアルが山元春拳にとっては絶対にこれはもう外せない名品だっていうのはよく分かるんですけど、内側の人間としては。でも、これを見たときにじゃあ山元春拳を知らない人が行ってみたいと思えるかという視点で見たときに、多分うちの学生やったら「え、何すかこれ」ってなると思うんですね。で、それって例えば他の常設展の「名品選3」とか2とかあるんですけど、そもそも滋賀県の名品知らんし、そこに名品選って書いてあっても何が見れるかさっぱり分からないし、これを見た時にポチっとしてもらえないと思うんです。それって TikTok みたいな話で、はじめ 5 秒でこの動画見るかどうかというのが今の若い人たちのこういうものとの接点だとすると、パッと見て無理って思われるものがほとんどであるということ、すごい広報にお金があってそこら中にビジュアルばら撒けるんやったら別ですけど、それをできない時ってというのはすごいほんとにもう若い人たちの人生の隙間ほんのちょっとのところパッと見た時にワツとなるかどうかということ、勝負多分しないといけないと思うんですね。特にそちらは車にすごいがんばって乗って行かないといけないし、すごい一日がかりでお金の無い学生が行けるかどうかということ、考えないといけないので、そうした時の展示会の出し方がもったいないと思うんです。行ったら私は満足するんですけど。どっちにしろ山元春拳知ってる人は来る訳ですし、他の作家さんも有名な作家さんは知ってる人はどっちにしても来る訳やから、知らない人にどう、たった人生 5 秒の隙間で行ってみようと思わせるかっていうアプローチが何かすごい少ない気がして。だからこの資料も、何かそういうことについては特に述べられてないというか、提供側の思想でまとめられた資料なので、それを見せられても私はどうしたらいいのかなと思って聞いてました。すみません、厳しいことを言ってる訳じゃなくって、何かもっと楽しくしたいなあって思ってお話を聞いてました。この会議もそうやし、美術館もそうやしってことです。以上です。コメントでした。すみません。

(事務局)

いろいろありがとうございます。資料を読む 30 分というのは僕も別の美術館に出てる時にしんどいなあと思いながら正直聞いてはいるんですけど。

(事務局)

あの TikTok 文化にどうやって美術館が組み込まれていくかという、対抗ではないですね、共存共栄していくかという、ご指摘も非常に受け止めたいと思います。僕のほうの反省点としては、例えば「石と植物」展というテーマが決まってから、その語呂が自分たちにしっくり来すぎて、いったいそこで何が展示されているのかということ、副題で正直言うと入れ忘れた。「石と植物」展だけだと本当に石と植物しか見られないと思っていた人がいるみたいで。当然美術作品が出てるんですけども。じゃあブランクーシが出てるよとか若林奮さんが出てるよとか李さんが出てるよとか小沢剛が出てるとかそういうことが伝わらな

かったということも、集客に響いたのだらうなと反省があったりもします。ですので、来年度の頭に開催いたします「小倉遊亀と日本美術院の画家たち」の展覧会につきましては、そうした反省もあるので、日本美術院と言っても知らない人はいるだらうというところで、そこで大観、春草といった名前を出せば知ってるかどうかは分からないですけれども、とにかくそこをもうちょっと具体的にしていこうといったところで、担当者にもお願いをしまして作家名を入れていくというかたちを取ったりもしております。その他、皆さまいろいろご意見ありがとうございます。

(委員)

ちょっと今の話にうまくかんでいるかどうか分からないんですけど。あまり美術に関心が無かったりする人に対して、どの程度アクセスしてもらえるかという話だったと思うので、そういう意味で言うと、見えない人・見えにくい人あるいは障害を持っている人に関して考えてみると、なかなか美術館というところは敷居が高いわけですよ。それで、例えば見えない人がぶらっと行くというのは、なかなか難しかったり、あるいは最近ですとヘルパーさんと一緒に行くという選択肢の中になかなか美術館はちょっと選ばれないというところがあります。で、何かやっぱりその美術館に行ったらブロンズの作品に触れたりとか、あるいは対話鑑賞、言葉で絵を鑑賞するようなツアーが行われているとか、何かそういうことが無いと、ちょっと一人で試してみようという気にはなかなかないというか、行っても楽しいことはあまり無いだらうなというような感じがするんですよ。だからそういう意味での取り組みなんかを今後考えられていたりするのであれば教えてほしいというのと、そういうチャンスを作っていくってほしいかなというふうに思いました。

(事務局)

ありがとうございます。今日議題の一つに多様な鑑賞への取り組みについて皆さんにご意見をお聞きしたいというふうにしておったのですが、実はもう今時間が11時10分でして、あと20分というところで、すみません最初に長々と説明してしまったことで大変申し訳なかったんですけども。来年度やろうとしていることについて、うちの学芸員のほうから説明をさせていただきます。

(事務局)

ありがとうございます。よろしくお願いたします。今パスを受けて企画を説明したいのですが、多様な鑑賞についてと議題に上がっております通り、多様な鑑賞って一体何が多様かというところについては、いろいろあるとは思っております。一つは今光島委員からもご発言いただきました通り、例えば見えない・見えづらいという障害を持った方々に対して、今まで従来どおりの展示の仕方ではなかなか情報にアクセスできないというような状況が現状としては多く見られると思っておりますが、そういったところを考え直していこうというような趣旨を持った展覧会を来年度に企画して開催していくことを検討、企

画を考えているところです。具体的には、館が持っているコレクションの作品を中心に、それらに対してですね、例えば触ることは実際にはできない作品について、平面の作品になると触ることはできないんですけども、そういったものに関しては、それを浮き立った図にする、触図といわれるものにして、触っていただくような鑑賞であったりとか、ただその浮き出た平面を触ったとて、その実際にある作品の要素というものはなかなか理解することはできなかつたり魅力というのは味わってない部分もあつたりするので、じゃあどうしたらいいだろうということ当事者の方と直接対話をしながら考えていくというようなことをしていきたいと思っています。で、それに関しては見えない・見えづらいということの障害以外にも、その他の障害に起因してなかなか展覧会に行くことができないというような状況も考え得ると思いますので、多様なニーズを持った方々と議論をしながら展覧会を作っていくということを画策しているところでございます。以上です。

(委員)

その企画、とても楽しみにしています。今年の2月くらいだったかな、ちょっと展覧会の名前を忘れてしまったんですけど寄せていただいたときに、澤田さんだったかな、3Dプリンターで実物ではないんですけど彫刻粘土作品を立体化して触れるようにしてあったものがあって、それが非常に作品を理解するきっかけとなつて、非常に良かった印象があります。そういう3Dプリンターの手触りもいろいろあって、面白くないなと思う時もあるんですけども、そういうものもいろいろ活用していただいてアクセスしやすい、あるいはそういう展覧会を企画していただければ、ぜひ僕も行きたいとまた思っています。

(委員)

よろしくお願いします。今、多様な鑑賞のお話が上がっていますが、やっぱりまずこの美術館に来てもらい、使ってもらいやすい楽しい美術館になっていくといいなと思います。そのためには、やり方であったり見せ方がすごく大事だと思うんですね。収入のほうには繋がらないかもしれませんが、例えば学校の現場で言うと、音楽の分野だったらびわ湖ホールで学校単位で行ける子ども向けのコンサートがあります。内容は本当にクラシックのコンサートなんですよ。ところが、見せ方が本当に子ども向けになっていて、すごく楽しめるパフォーマンスがたくさん仕掛けられていて、子どもがとても楽しい時間を1時間ほど過ごせるというプログラムになっています。それを美術のほうに置き換えた場合に、足を運んでもらうというところにまず一つの壁があるんですけども、先ほど5館でネットワークを作られているということですが、その中に琵琶湖博物館や陶芸の森がありましたね。実はここへは子どもたちは校外学習でバスを使って行っています。ということは、何もここで一日過ごす訳ではないので、何か他と掛け持ちをします。その掛け持ち先に、ここの県立美術館も入れてもらえるといいなと思います。そのためには、やっぱり何かこう魅力が無いといけなないので、子どもが楽しんで帰れるような企画があると良いと思います。どのように美術作品を見せていくか、作品から学ぶというところからでいくと、例えば小学生が普通に作品を見て

るだけでは無理なので、そこに例えば「この作品から何々を見つけよう」とか、「いくつあったか」とかちょっとクイズ形式の課題みたいなものがあると、子どもも楽しめます。そういうプログラムが用意されていると良いです。あと今、対話型鑑賞というのが学校の現場でも広がってきているので、学芸員さんが何か投げかけてくださったことを子どもたちとギャラリートークみたいにしていくとか、プロの方の難しい作品であってもやり方次第では高学年の子どもとか中学生ぐらいだったら十分見せていただけるようなものがあると思います。その辺はやっぱり美術館の予算だけではなくて、例えば県の教育委員会のほうにもそういうことを投げかけていって、教育の予算をつけてもらうことも必要なのかなと思うのですけれど。音楽の分野では結構そういう楽しい取り組みがあるので、それが美術のほうで何かできると、子どもたちが学校からこの美術館で見せてもらえてというようなことが増えていくといいなと思っています。なんか漠然とした感じなんですけれども、そういった繋がりがまた今後できるといいかと思います。

#### (委員)

多様な鑑賞についてというところと今まで皆さんが議論していたところでちょっと私も言いたかったことがあるので、それを含めて話していこうと思うのですけれど。私は長浜市に住んでいるので滋賀県の北部に住んでいるということと、子育て世代というところの目線、ほんとにさっき蔵屋さんが言ってくださった完全にユーザー目線でほんとに美術のことは全く分かってないっていう者が今からしゃべるとしてほしいんです。まずこのいただいた資料のアンケートの結果というところで、どこに住んでいる人が来ているかという県内の部分が、半分は県内の人に来てくれるところでしたけど、やっぱり県内もとても広いので、また次回から出される時に北部の人たちがどれくらい来ているのかというところはすごく興味があります。で、広報もすごくお金をかけてくださっていてすごくいろんな、私も南の方に行くとかこういう看板とかいろんなものを目にしたことがあったのですが、なかなか北の方にいる時にこの広報の中身だと子育て世代が目にするものはすごく少ないなというように思いました。学校から来るチラシであるとか市町の広報紙であるとか、あとはやっぱり Instagram、この美術館の Instagram もすごく一生懸命全部見てみたんですけど、お金のかからない広報の仕方ってすごくあると思うので、Instagram とか広報とかうまく活用していけるといいなというように思いました。子育て世代としてその Instagram を見てみた時に、やっぱりちょっと写真が何というのかな、あんまり子どもが行っちゃいけないんじゃないかというような出し方というか、中には子どもちゃんが写ってて、たぶんこの「アートにどぼん！」ですかね、この系統の発信はすごくうまくされていて、私も行きたいなと思うんですけど、それ以外のところはちょっとうるさい子どもが一緒に行ったらとか何か壊すんじゃないかとか、どっちかというとパッと見た時にその印象を強く受けたので、ホームページの中では「アートにどぼん！」って結構たくさん月に1回くらい開催されたりされてたので、そのへんの募集をもっと Instagram でやっていくとか。あとごはんの話もあったんですけど、子育て世代が子どもを連れて何を食べれるかなっていうのをすごく見たいんです。で、

カフェもあって子どもが食べれるものがどれだけあるか分からないですけど、そのへんのところもちょっと Instagram の雰囲気がかもしたら崩れてしまうということがあるのかなと思って、私もこれは言うべきなのかとは思ったんですけど、もっともっと身近な……何と言うのかな、身近で見やすい投稿をしたりとか、せっかくキッズスペースもあるので遠くから撮っただけではなくて実際中に入るとどれくらいの授乳スペースがあって遊ぶスペースがあってというような、もっともっとイメージの湧くような広報をしていくととてもいいんじゃないかなと思います。あとは、北からここまで行くのにお話が出てましたけどすごく時間がかかるので、ほんとにもう旅行みたいな感じなんです。この美術館だけ行くというのはなかなか難しいので、びわこ文化公園はちょっと見させてもらったら遊具とかわんぱく原っぱっていうんですかね、遊具があるところとかいろいろあるので、美術館とセットでそういう遊具のところとか芝生で走れるところがあるよとかいう発信を、もっともっとサイトも Instagram も使ってやっていくと、少しずつ若い世代のお母さんたちも行ってくれるんじゃないかなと思います。

(委員)

よろしいでしょうか。私は新聞社に勤務しておりますが、新聞社とこちらの美術館とよく共催で業務させていただいて、その時に思うのは、滋賀県ってこんなに美術家がいんだなということをよく発見するんです。滋賀県にいる美術家というのは知っている人は知ってると思うんですけども一般的にはあまり知られていないことであります。で、おそらく子どもたちも滋賀県の美術家についてはよく知らないと思うのですが、滋賀県といいますと琵琶湖がありまして滋賀県の子どもたちは必ず琵琶湖で学習船に乗ってですね、小学校5年生になると琵琶湖の研修体験をするんですけど、それがあから滋賀県の子どもは琵琶湖に関心をずっと持ち続けるんです。同じことがこの美術の分野でもできないかなというふうに思います。小学生全員を必ずこの美術館に連れて行く、どれだけ可能か分かりませんが、そういったかたちで美術に触れさせるという体験を小さいうちに持つ、そういうことをプログラムにしていくことが必要ではないかなと思います。あと、滋賀県の子どもは井伊直弼は知っていても、例えば山元春拳であるとか小倉遊亀であるとかいう名前は知らないと思うんですね。それは、政治史みたいなものと教科書にも出てくるしそれで認識するんですけども、美術史というのは学校でもあまり教えないし、日常的にもあまり話題にならない。ということを見ると、滋賀県の芸術家を網羅した滋賀県の文化史みたいなものをですね、滋賀県ではそういう研究者も多いので子ども向けにまとめてもらって、冊子でもあるいはデジタル素材でも作って、そういうものをまとめてもらって学校ですとか出前の講座で役立ててもらおうのはどうでしょうか。そういうことで滋賀県の芸術家の名前が頭にインプットされると、長い時間の中でじゃあ滋賀県の美術をもうちょっと見てみようっていう、そんな長い時間をかけて増やすことができるんじゃないかというふうに思います。

(委員)

二点申し上げたいと思っています。一つは地域連携についてです。私自身が美術館の会議に出させていただいて、この美術館をプラットフォームにしてほしいということをお願いして、それがだんだん形になってきているなというのはとても嬉しく思っています。でも、まだまだ私は満足はしていません。もっと広げていっていただきたいな。そこに多分行政の壁というものが出てくるのだと思いますが、それを打ち破るくらいのことをしていただきたいなというふうに思っています。地域連携というのは私自身がすごくこう、広範囲にわたることなんだなということを最近痛感しています。今やっぱりお聞きしていると、プラットフォーム的な働きができてるのは教育・学校との連携、そこはできてきているんだなというように思いましたけど、スタート当初から具体化していくとちょっと学校間との連携に何か小さく地域連携がなっちゃったかなという思いを持っていたんですけども、5館のネットワークを設置されたというのを聞いて、これも一つまた打ち上げていただけるきっかけになっていくんじゃないかなと期待しています。行政の壁と申し上げたのは、私ら素人から見るとなぜここにびわ湖ホールは入っていないのかなとか、音楽・美術とジャンル分けたらだめやと思ってるんですよ。それをやると、どンドンちっちゃくなって。びわ湖ホール、あれだけ県がお金つぎ込んでいろんな活動されて世界に発信するところまできているので、ぜひそこは連携してほしいなと思っていますし、県立施設に限らなくてもいいじゃないかと思っています。例えば、山元春拳展はよくやってくださったと思っていますけど、惜しかったなと思うことが一点あって。大津市歴史博物館でも春拳展しましたよね、あれの会期がずれてたんですよ。あれを同時にやっていたら、蘆花浅水荘さんは大変だったと思いますが、もっと大きな波になったんじゃないかなあとと思っています。そのあたりを、これから広げていっていただきたいというのが一点です。もう一点は、企画展を私はもう以前から保坂さんご存知のようにそんなにお金も無いしアクセスも悪いし、これ致命的なんですけれども、とんがった企画をするしかないじゃないですかと申し上げていたんで、そこは本当ががんばっていらっしゃるなと思っています。ただ、やっぱり何でもバランスが大事ですので、一方でより多くの人に親しまれる美術館にしようと思うと、これもう私いつも言ってますけど私はやっぱりギャラリーの機能というのをしっかりと捉えられたほうが良いと思っています。私はちょっとショックを受けているのは、ギャラリーの稼働率です。なんでこんなに低くなったのかな？リニューアル前、なかなか取れない状態でしたよね、ギャラリーって。それがどうして半分しか稼働していないのかというのは、よくお考えになったほうが良いと思いますね。以前の協議会になる前にギャラリーの来場者数を出されなかったんですよ、長く。で、「一回出してくれ」とさんざん言って、最後のほうの協議会でやっと出てきたら、企画展よりもギャラリーの来場者数のほうが多かったんですよ。で、これはね、いろんな思いがあると思うんです。現実には現実だと思いますし、ギャラリーというのはそういう役割を果たすんだということですよ。たくさんの方に見ていただくというのも大きな目的だと思っていますので、やっぱりギャラリー機能の充実というのはぜひ考えていただきたいですし、正直、今すごく使いにくくなっていますね。博物館法の規定上ね。動線が

混在していますので。そこを前回の協議会でも申し上げましたが、どのようにお考えになっているのかというのをやっぱりこの場で何か方針を示していただきたいというのが一点です。それから、これはまあ提案というかお願いですけれども、これも前から言っていますが、企画展示室と申し上げたほうが分かりやすいと思いますので申し上げますが、あれを年間ずっと企画展示だけで終始しないで、貸館に使わせてほしい。これは利用者目線で。貸館としても使わせていただきたいと思っています。お隣に京都市京セラ美術館さんがいらっしゃるんで、私実は毎日書道展関西展でお世話になっているんです。やっぱりそれ両方あって初めてバランスが取れると思うんですよね。こんな場で言うのは何ですけど、貸してほしいとお願いした時にやっぱり保坂さんの答えは予想どおりで、一生懸命考えてくださったんですけど、現状では貸館はしていないのでということで、一つ大きな展覧会を持って来れそうだったんですけども諦めました。断念しました。もう今、計画自体が取りやめになった状態になっていますし、一つはもう取りやめになってしまいました。二つお願いしていたんですけどね。本当にもったいないと思うんです。ですから、先ほど一番最初に後藤委員がおっしゃったように、この学芸員の数で四つの企画展やってこれだけの業務をされて大変ですねとおっしゃったと思うんですけども、それを貸館を入れることで少し和らげられる面もあると思うんです。これも前から申し上げてるんですけど。企画展の数を減らすのが嫌だったら日数をちょっと短縮して、10日空けてそこを貸館、それでできますからね。何かそういう手立てを考えていただいて、ある程度、多少なりとも収益は出ますしね。また美術館にわれわれ当事者が思っていなかったような人がここまで足を運ぶきっかけにもなると思いますので、ぜひこれはご検討いただきたいなと思っています。長くなって申し訳ございません。

(事務局)

もうすでに実は時間が延びておりまして、全部に答えると、ちょっと時間が無いので省略させていただきたいんですけども。いろいろご意見いただきまして、ありがとうございます。貸館については公開承認施設の指定を受けている美術館として、実際にはなかなか難しいところがある、主催事業以外で展示室を使った場合に、その指定を受けづらくなるというのは事実としてあるので。ここは本当にわれわれとしても申し訳ないなと思いつつ、一方で長く指定を受けている美術館としては致し方ないのご理解いただきたいというふうに思います。皆さまから頂戴したご指摘を受けて、また次3月にですね、予定として協議会を開催させていただきます。その時に改めて、いくつかについてはご報告させていただきたいと思っておりますし、委員からもご指摘ありましたようにあるいは他の委員からもご指摘ありましたけれども、早めに資料を作成して、あれですかね早めに資料を作成すればもう説明を省略してもよろしいものなのではないでしょうか。よろしいのであれば、ぜひとも協議のほうに時間を集中させたいと思います。実は今までは1時間半くらいしか協議会の時間取ってなかったんですけど、今回2時間取ったんですけどそれでも足りないというところで、皆さまのご意見をもっとわれわれも受け止めたいと思いますので、ぜひともよろしくお願ひいたします。あと

もう一つ議題がありまして、会長よろしく願いいたします。

<会長>

はい。皆さまご議論ありがとうございました。ご質問・ご意見にとどまらず、先にちょっと多様な鑑賞というところまで皆さまに活発なご意見をいただきました。車椅子やベビーカーなどアクセスに困りごとを抱えていらっしゃる方、あるいは美術に全然興味無いよとおっしゃる方、あるいは子どもがいらして行っていいのかいけないのか情報が掴めず困っている方、あるいは見えないとか足がお悪いとか聞こえないとか様々な障害をお持ちの方、あるいは県の遠いところに行くのが大変だという方、そうしたいろいろな方たちが「美術館に来ていいんだよ」「来たらこんなに具体的に楽しいことができるんだよ」ということを発信していくなかで、より美術館が皆さんに楽しんでいただければいいなというお話だったかと思います。また、ギャラリーを借りていらっしゃる団体の方々の展示も含めて美術館の魅力として考えていくべきだというご議論だったかと思います。そうしましたらですね、もう一つの議題ですね。その他（3）のところ、滋賀県立美術館収蔵品収集審査部会について、事務局からのご説明をお願いいたします。

### 【議題3】

その他 収蔵品収集審査部会について

<事務局からの説明>

委員の選定については、後日事務局で行うことで了承

### 【閉会挨拶】

(事務局)

本当に皆さま、ありがとうございます。いろんなご意見が印象的で、委員から出てきた滋賀の美術史の子ども向けの冊子を作ったらいいんじゃないかというのは作りたいなと思うんですけども、ここで僕が作りたいと言うと後ろの学芸が「おいおい、作るのか」と、そんな時間とお金がどこにあるんだと思うかもしれないですけども、そういう予算のことはひとまず置いておいて、いろんなご意見を頂戴できるというのがこの場になりますので、皆さんお忙しいと思うのですが、機会がありましたらメール等々で頂戴できれば、それをもって次の協議会で私のほうから話させていただくこともできますので、ぜひ随時ご意見頂戴できればと思います。本日はどうもありがとうございました。